

No.102 植村 公雄 —無題—

Kimio Uemura

北川フラムさんのコラム / 1998 (平成 10) 年 9 月 15 日付 立川市市報記事より

植村公雄の作品には造形の楽しさがある。いろいろな部品が組みあわさって、詩的な世界に私を誘ってくれる。

その作品では色が重要な要素になる。この車止めでは白と赤の対比が、やわらかな雪を舗道に浮かせているようでもある。

氏のタイトルでも、鳥とか手、夜、一輪車、ロブスター、とかいったものから、遠くから訪ねてきた友、風景、予感、南風といったものまで多様で、作家が楽しんで造形していることがわかってくる。彫刻家のつくる作品が風景の物語をつくっている。

作家のメッセージ / 日本住宅公団 (現 : UR 都市機構) 「ミニ通信」より

今私の作品にこうあって欲しいと思う事、思いつくままに・・・。

深刻ぶっていないこと。

親しみやすいこと。

何の意味もないこと。

重くないこと。

軽くないこと。

強すぎないこと。

弱すぎないこと。

難解でないこと。

さりげないこと。

尊大でないこと。

いじけていないこと。

堂々としていること。

理屈っぽくないこと。

凜としていること。

毅然としていること。

ユーモアを知っていること。

命が輝いていること。

無限の秘密を持っていること。

淡々としていること。

静かに呼吸していること。

そして

ただそこに在ること。